〈論　文〉

「福音印刷」創業者　村岡平吉の軌跡

峯岸　英雄

モンゴメリー『赤毛のアン』の翻訳で知られる、童話作家、社会評論家・村岡花子の義父は、キリスト教系出版の印刷製本会社「福音印刷」を横浜山下町で創業した、業界では「バイブルの村岡」と称された、村岡平吉（以下、平吉）である。本論は、横浜に所縁のある平吉の軌跡を、キリスト教を中心とした近代日本精神史と、近代日本印刷文化史の両面から考証するものである。（以下、論理の展開上、記述が重複すること、ご容赦願いたい）

まず、略歴を列記する。平吉は一八五二（嘉永五）年、神奈川縣橘樹郡城郷村小机（現在の横浜市港北区小机町）で生まれた。明治初期に東京、横浜方面で印刷職工の修行を積み、一八七七（明治一〇）年、横浜山手の外国人居留地内のフランス新聞社「レコ・デュ・ジャポン」に入社。横文字活字を組み立てる欧文植字工としての腕を磨き、中国へ渡り、海外宣教師による中国国内向けの聖書印刷を目的として設立された、上海美華書館で印刷製本技術を修得。帰国後、横浜製紙分社に入社。一八八三（明治十六）年には住吉町教会（後の横浜指路教会）で米国人宣教師ノックスより受洗。熱心な信仰から一八九〇（明治二十三）年には横浜指路教会長老となった。一八九八（明治三十一）年に、独立し「福音印刷合資会社」を創業。関東大震災前の一九二二（大正十一）年に死去している。

平吉の生涯の意義は、横浜指路教会を軸とする信仰生活と並行した伝道活動における社会貢献と、福音印刷の事業

展開による明治以降の印刷製本文化発展の貢献にある。

クリスチャン・村岡平吉

クリスチャンに至るまでの平吉の心の軌跡はどのようなものだったか。信仰心の篤い実姉の影響もあったが、背景には明治社会における一大潮流ともいうべき、キリスト教の勢いがあった。印刷職工修行時代の場が東京・横浜という土地柄から、多くの外国人と出逢い、また開明思想のキリスト教文化と接触していたことに加え、江戸から明治への時代変遷の中、〝立身出世〟を夢見るも、理想と現実の問題に直面し、精神的に煩悶、苦悩の状態に陥った青年期の平吉の面前に現れ、安寧な境地に誘ってくれた、キリスト教は斬新な思想であったろう。

一八八三（明治十六）年四月、横浜指路教会の前身、横浜住吉町教会に通っていた平吉は、アメリカ人宣教師、ウィリアムス・ジョージ・ノックスから洗礼を受ける。翌一八八四（明治十七）年一月には教会執事、一八九〇（明治二十三）年二月には横浜指路教会長老に就任している。受洗から七年という期間での長老就任を順当な昇進とみるか、異例の出世と考えるかは判断が難しいが、いずれにしろ平吉の篤き信仰心が日々増していたことには間違いない。

ここで平吉の信仰基盤となる横浜指路教会について解説しておきたい。一八七二（明治五）年五月、米国長老教会宣教師ヘンリー・ルーミスが横浜に上陸する。当時、横浜では後の明治学院創設者でもあるジェームス・カーチス・ヘップバーン（通称ヘボン）が医療行為、布教活動に加え英語塾「ヘボン塾」を開設しており、同塾生の南小柿（みながき）洲吾がルーミスから受洗。やがてルーミス、南小柿、ヘボンの協力で横浜第一長老公会が設立され、日本基督一致住吉町教会へ改称後、一八九二（明治二十五）年、新会堂建設に伴い、指路教会が誕生する。因みに「指路」という名称はヘボンの母教会「Shiloh」に漢字を当て嵌めたもの。横浜指路教会の中には、教会の一部を仕切った女子住吉学校が併設され、地域教育に貢献している。平吉も

女子教育の必要性を感じ、向学心を抱きながらも、東京で困窮の女中生活の身であった、親戚の芝ハル（後に社会事業家・賀川豊彦と結婚）を横浜に呼び寄せ、この女子住吉学校に入学させている。

更に平吉は横浜指路教会の活動と運営を充実させるため、優秀な日本人牧師として一九〇四（明治三十七）年、ルーミスやノックスも学んだニューヨーク市のオーバン神学校[1]に留学中だった、毛利官治を招聘する。以後、毛利は永眠までの三十七年間に亘り、関東大震災の教会焼失や昭和初期のキリスト教界の苦難時における横浜指路教会の盤石な礎を築くと共に、横浜各地で積極的な開拓伝道を展開していく。

その影響を受けた一人が、神奈川縣都筑郡下谷本村（現在の横浜市青葉区市が尾）出身で、一九〇八（明治四十一）年、陸軍在籍中に負傷し、下半身不随となりながらも農業指導者として活躍していた廣田花崖（鉄五郎）であった。不自由な体から精神苦悩に陥っていた廣田は、現在の横浜市都筑区川和町地域で伝道に従事していたスーザン・プラット（共立女子神学校校長）と城戸順（横浜指路教会伝道部長）の訪問を受け、キリスト教に導かれ、一九一四（大正三）年、横浜指路教会で毛利から受洗した。

廣田は従来から創作活動に関心があり、プラットから本格的に英語を学び、後にマーレー『基督の如く』（一九一七・大正六年、基督教書類会社）ウォルトン夫人『岩の謎』（一九二五・大正十四年、同）などの翻訳だけでなく、自らの農業指導体験と周辺農民たちの日常を描いた『田園』を一九二五（大正十四）年に刊行。同書は一九一三（大正二）年に刊行された、徳冨蘆花『みみずのたはこと』を意識したことを予想させる内容展開であるが、中央文壇作品にも劣ることのない農業抒情詩ともいうべき大作と言える。

平吉が毛利を横浜指路教会に招聘したことが、結果的に郷土作家・廣田花崖を誕生させたことも含め、多忙な印刷会社経営の傍ら、教会内外での平吉の活動と業績は計り知れない。

村岡平吉と朝鮮

数ある平吉のキリスト教事業に、朝鮮人留学生支援がある。その足跡を辿ることは、近代日本のキリスト教界と朝鮮の関係史でもある。十九世紀末のキリスト教をめぐる日本、中国、朝鮮の三国は相互に深い関係があった。中でも、教義理念の原典である「聖書」を如何に自国語に翻訳するかが最大の課題であった。

この問題の象徴例が『明治字典』の刊行であろう。同書は、中国の「康熙字典」（清時代の中国の漢字字典）を模範とした、日本語訓、韓音訓（ハングル）、北京音、英語を併記した字典で、一八八五（明治十八）年、東京・大成館から刊行された。後年の日清戦争、日韓併合という政治的背景からも察せられるように、日中朝の外交における言葉の理解、解釈、翻訳上の需要に起因した編纂と刊行の側面があるも、キリスト教界においては聖書翻訳にこうした辞典（字典）の刊行は重要な役割を担うこととなる。

平吉自身は、「レコ・デュ・ジャポン」時代に朝鮮、中国で伝道布教に奔走尽力していたカトリックのリデル司教が、生涯を賭けて編纂した原稿を基にした『韓仏辞典』の刊行に携わっていた。この時が、平吉がキリスト教を通して朝鮮を認識した始まりであったと思われる。

先掲の『明治字典』の編纂者に朝鮮の李樹廷がいる。一八八二（明治十五）年、朝鮮の高宗皇帝の配慮で遊学の為に来日した李樹廷は、農学者・津田仙（津田梅子の父）に日本の農法を学ぶと共に、漢文聖書を読むなど津田を通してキリスト教に関心を示す。やがて、一八八三（明治十六）年に東京露月町教会で安川亨から受洗する。当時、朝鮮宣教に備え朝鮮語訳の聖書を構想準備中だった、横浜指路教会のルーミスが李樹廷に接触し、聖書の朝鮮語訳を依頼する。その結果、一八八五（明治十八）年、横浜米国聖書会社から『新約聖書馬可傳諺解』が刊行される。(2)

当時、平吉は上海から帰国し、聖書・讃美歌も印刷製本していた横浜製紙分社に勤務していたこと、また横浜指路教会執事であったことを想起すれば、ルーミスを通して李

樹廷と接触していた可能性もある。とすれば、平吉がキリスト教を介して、朝鮮と朝鮮語を本格的に認識した時期であったのではないか。平吉と朝鮮をめぐる次なる段階が、日本組合基督教会派による朝鮮伝道である。韓国併合後の一九一一（明治四十四）年から、日本のキリスト教界は海老名弾正の薫陶を受けた渡瀬常吉らが主導者となって朝鮮伝道を開始する。しかし、伝道の内実は日本国民への同化政策、政財界からの援助、朝鮮総督府からの寄付という活動から、内村鑑三、柏木義円、湯浅治郎ら進歩的キリスト者が、伝道に反対したように日本の教界内で不協和音が生じることとなる。

では、長老派教会の横浜指路教会に属していた平吉のスタンスはどのようなものであったか。教会機関誌「指路」ではキリスト教で朝鮮人を指導すべき、との論陣を張っていた。しかも、平吉は先掲の渡瀬常吉の著書『朝鮮教化の急務』（一九一三・大正二年十一月、警醒社）を印刷している。同書には題名が示すように「朝鮮の教化を以て国家の大責任と自覚し」「國家的運動」という認識を保有する旨が序文に記されている。

勿論、取引先の警醒社の請負という、ビジネスライクに割り切った解釈も必要だろうが、この時期、横浜指路教会長老という平吉の立場から朝鮮伝道に対する姿勢は問われるべきかもしれない。まして、レコ・デュ・ジャポン時代と李樹廷との関係も含めた朝鮮理解の期間も考慮すれば尚更、という見方もできる。

一九一四（大正三）年、在日本東京朝鮮留学生学友会・機関誌「學之光」が創刊され、福音印刷が印刷製本を請け負う。一八八三（明治十六）年、徐載弼らの慶応義塾受け入れを嚆矢に、日韓併合前後には朝鮮人留学生は五百名を数えるに至る。「學之光」発行の背景には留学生の母国・朝鮮が日韓併合による、武断政治と言論弾圧から、敢えて日本で言論活動を展開しなくてはならない状況があった。（福音印刷は関東大震災まで計十二種類の朝鮮人雑誌を印刷していた）平吉は他に在日朝鮮基督教青年会（朝鮮

YMCA）機関誌「基督青年」も印刷製本している。内村鑑三、新渡戸稲造も寄稿していた同誌は、キリスト教出版を本業とする福音印刷ならではの仕事と言える。

「學之光」は、朝鮮はもとより、ハワイやメキシコ、アメリカに在住する朝鮮人活動家にも頒布されていた。結果的に平吉の朝鮮人留学生支援としての印刷事業が「バイブルの村岡」というアジア諸国への聖書の拡散同様、世界的に認知されることとなる。

平吉の朝鮮及び朝鮮人に対する理解度、認識力については、個人のキリスト教活動の側面も含め、今後も慎重且つ精緻な調査研究が求められる。(3)

村岡平吉と福音印刷

平吉の〝本業〟である「福音印刷」とはどのような会社であったか。重複するが、平吉の本格的な印刷職工の人生は、一八七七（明治一〇）年の横浜山手外国人居留地内のフランス新聞社「レコ・デュ・ジャポン」入社から始まる。フランス人、セール・レビーが代表を務める同社は、新聞の他、名刺、案内状、契約書類印刷、書籍出版、万年筆などの文具、紙類を販売しており、社員は日本人を中心に十五人の植字工、五人の記者、一人の通訳がいた。(4) 同社は新聞と並行して雑誌「日本の声」と先掲の『韓仏辞典』を発行している。

その後、平吉は「レコ・デュ・ジャポン」を退社し上海に渡航。「上海美華書館」で欧文植字工の腕を活かし働くこととなる。一八四四（天保十五）年、アメリカ長老教会が中国国内向けの聖書印刷を主としてマカオで創設された美華書館は、一八六〇（万延元）年上海に移転。上海美華書館となる。（正式名称は SHANGHAI AMERICAN PRESBYT ERIAN MISSION PRESS「上海米国長老教会伝道社印刷所」）高品質の活字を保有していたことから世界有数の印刷所とされた。日本との関連では同館で、ヘボン『和英語林集成』（一八六七・慶応三年初版）が印刷されている。この時ヘボンに同行したのが、洋画家・岸田劉

生の父、岸田吟香であった。岸田は眼病治療のためヘボンを訪ねたことから交流が始まり、眼病治療を手伝う中で、目薬の処方を習得、一八六七（慶応三）年、日本初の目薬「精錡水」を販売した。『和英語林集成』上梓に果たしたヘボンの右腕ともいうべき岸田の功績は高く評価される。尚、平吉の同館勤務の経緯は不明だが、横浜指路教会、ヘボンの斡旋によるものとおもわれる。[5] いずれにせよ、この上海時代が平吉の印刷製本技術を向上させた好機であった。

平吉の上海滞在は僅か一年で、横浜指路教会執事就任前の一八八四（明治十七）年一月に帰国し、横浜太田町の王子製紙株式会社横浜製紙分社に入社。やがて工場監督となった平吉は一八九二（明治二十五）年、同社から先掲のルーミスが日本人牧師・奥野昌綱と共に編纂した『讃附聖公會讃美歌』の印刷を担当するなど、キリスト教出版の印刷業務の責任者であったことが分かる。[6] 一八九八（明治三十一）年、平吉は二十年以上にも及ぶ印刷職工の経験を活かし、自身、横浜指路教会長老という背景からキリスト教出版の印刷製本会社「福音印刷」を横浜山下町八十一番地に創業（大正元年、山下町一〇四番に移転）し、「赤レンガづくりの三階建ての本館と両わきに印刷工場と倉庫三むねが並び、小さいながら印刷と製本の設備をもった総合的な組織」として発足した。[7] 福音印刷の社屋は日本画家・速水御舟の「横浜」（一九一五・大正四年）にも描かれるほど港町・横浜の象徴的な建物であった。後に平吉は、その事業の成果を称えられ「印刷業の巨擘」[8] と謳われる。

平吉以外の福音印刷創立時の役員は、星野光多（牧師）、福永文之助（キリスト教系出版社・警醒社社長）、半田研吉[9]の三人とされる。主な取引先は先掲の警醒社を始め、救世軍出版部、日本聖公会出版社、日本基督教興文協会[10]などがあり、業務は聖書、讃美歌、キリスト教啓蒙書、教義理念書からトラクトに至るまで、キリスト教関連専門の印刷製本であった。[11] 内村鑑三、植村正久、新渡戸稲造、海老名弾正、小崎弘道、宮川経輝、松村介石、留岡幸助ら近代日本のキリスト教界の主要な人物の書籍を印刷してい

る。

中でも作家・徳冨蘆花からは全幅の信頼を寄せられていたようで、『ゴルドン将軍傳』（一九〇一・明治三十四年）、『順禮紀行』（一九〇六・明治三十九年）、『寄生木』（一九〇九・明治四十二年）、『新春』（一九一八・大正七年）を印刷製本している。『順禮紀行』は一九〇六（明治三十九）年四月から八月までのパレスチナ、エルサレムの聖地順礼と蘆花自身のトルストイ訪問の記録という内容を意識してか、小型聖書を模した装丁が為されている。

福音印刷の最大の事業功績は矢張り、聖書の印刷にある。そもそも、横浜と聖書の関係の歴史は、先掲のヘボンが旧来の抽象的で難解であった和訳聖書を教会公用に相応しいものとして、一八七二（明治五）年木版本『新約聖書約翰傳』（ヨハネによる福音書）を刊行したのが嚆矢で、更に、ヘボンが一八八八（明治十一）年に日本人キリスト者を加えた「聖書常置委員会」を組織し、聖書普及事業を推進してきた。

こうしたヘボンの活動が、平吉の福音印刷による最新技術によって、多くの部数の聖書の流通に発展、拡大していく。福音印刷の特長は、英語は勿論、ハングル、インド、台湾、シンガポール等アジア諸国を中心とした多国活字を保有し、印刷製本した聖書を輸出供給してきたことで、このことが「バイブルの村岡」と称される所以となる。[12]

一八九八（明治三十一）年の創業以降、福音印刷は明治期のキリスト教信者の増加、京浜地区のミッションスクールの隆盛という相乗効果で事業を拡大していく。まず、一九〇四（明治三十七）年に神戸支社（元町・吾妻通）、一九一四（大正三）年に東京（銀座）支社を開設。東京は平吉の三男・儆三、横浜は平吉が運営する。（横浜は平吉の死後、五男・斎が担当）各社では毎週月曜日に就業前に礼拝が行われており、周辺教会から牧師が招かれ説教も行われていた。これらは、労働を通して神に感謝する、横浜指路教会長老としての平吉の方針であった。

農商務省商工局が、一九〇一（明治三十四）年に今日の

労働基準法の原型「工場法」立案資料として行った、労働事情の調査報告書『職工事情』には鉄工、硝子、セメント各職工などと共に印刷職工の項目が設けられ、問題点が指摘されているように、明治期の労働環境は劣悪であった。福音印刷では儆三の提案で、いち早く八時間労働を実現し、環境の改善を施している。皮肉なことだが、平吉の親戚であり、福音印刷神戸支社工場に説教に訪れていた社会事業家・賀川豊彦は自著『印刷工の運命』（一九二一・大正一〇年、労働組合研究所）の中で、印刷作業が引き起こす鉛毒、肺病などの健康被害を指摘し、印刷業界の劣悪な労働環境を糾弾している。工場内では裁断機による指の切断事故等も頻発していた。[13]

当然、労働運動がおこり、一八九九（明治三十二）年の段階で印刷工組合・活版工同志懇話会が組織されている。その横浜支部幹事には福音印刷の大野国太郎が就任している。更に、福音印刷を始めとした横浜地域の欧文植字工の労働組合・横浜欧文会が組織され、福音印刷のホーマン（職長）、若宮友太郎が幹事長兼会計主任となっている。[14]全身、刺青だった平吉は強面だが人情味があり、そのバイタリティー溢れる行動力で職工の代表役である大野、若宮と社内調整を図りながら福音印刷を運営していく。

福音印刷の高度な製本技術と装丁には定評があった。一九〇八（明治四十一）年『Prehistoric Japan』（先史時代の日本）という全文英文、七〇〇頁を超える本が刊行された。著者は当時、横浜山下町で医院を開業していたイギリス人、ニール・ゴードン・マンローで一九〇五（明治三十八）年、現在の神奈川県立横浜翠嵐高校脇の三ツ沢貝塚を発見した[15]考古学者でもあった。[16]同書は古墳・土器などの豊富な写真図版を駆使した、本格的な日本考古学の概説書であった。しかし、大森貝塚を発見したエドワード・シルベスター・モースのような公人ではなく、民間人のマンローは自費出版を考える。

マンローは、全文英文という印刷の難問を解決するため山下町の福音印刷を訪ねる。英文聖書を刊行するなど欧文

活字を豊富に保有し、写真図版の高度な製版技術を備え、熟練の欧文植字工を擁した福音印刷ならば、正確かつ迅速な対応が可能、との判断であった。日本語が話せないマンローの交渉役が優れたバイリンガルの平吉であった。平吉は、印刷面だけでなく、考古学書のイメージから同書の表紙に埴輪と土偶の絵を施したデザインに加え、濃紺の装丁でマンローの要求に応える。平吉とマンローは何度も打ち合わせを重ね、「日本の考古史に関する科学的の著書殆ど一あって二なき特絶の選にして誠に学界の珍なり」（「都新聞」評）の書が出来上がった。

平吉の製本への篤き情熱は五男・斎（ひとし）に受け継がれる。斎は短期ながら英国で印刷製本技術を修得。福音印刷の東京銀座本社を任されていた兄の儆三が学者肌であったのに対し、斎は実業家タイプと言われていた。[17] その斎が製本装丁上の実験を試みた形跡が、徳富健次郎（蘆花）『竹崎順子』（一九二三・大正十二年四月、福永書店）に表れている。蘆花の叔母で横井つせ子（幕末藩士・明治新政府参与、横井小楠の後妻）、徳富久子（徳富蘇峰・蘆花の母親）、矢島楫子（日本基督教婦人矯風会会頭、東京女子学院創設者）と共に熊本県益城郡「四賢婦人」と称された、熊本を代表する女子教育家で、横井小楠門下の儒学者・竹崎茶堂の妻、竹崎順子の伝記である同書は約九〇〇頁、五センチもの厚さで、堅牢な紙製の箱に収まっている。

同書の特長的な装丁は、本を革や擬革で包み込む、汚損を防ぐ役目も持った聖書に代表される「垂れ革」を施していることである。斎は同書に擬革として木綿を使用した。一般書で垂れ革を用いたものでは、大倉書店発行の夏目漱石『吾輩は猫である』の寸珍本（袖珍本）が知られているが、『竹崎順子』のような大型本では例がない。英国での印刷製本技術修行時代に、何かヒントを得たのか。書棚に飾られることを想定したかのような、父・平吉もできなかった装丁の壮大な実験を斎は試みたのかもしれない。[18]

福音印刷は関東大震災で壊滅。斎も横浜本社で七十名の社員と共に亡くなってしまう。（東京銀座支店にいた儆三

と、大森の自宅で息子・道雄と居た花子は生存）この結果、福音印刷は倒産してしまう。歴史に「if」は禁物だが、もしも関東大震災がなければ、もしも斎が亡くならなければ、その後の福音印刷の運命はどのような軌跡を辿ったのだろうか。実業家タイプの斎が舵を握り、発展していったのではないだろうか。但し、創業理念のキリスト教系出版の印刷製本だけでなく、一般書籍業務の割合を増やした可能性がある。理由は大正期のキリスト教の趨勢にある。明治期に急激に信者数が増加したキリスト教界も大正になると減少傾向となるからだ。

福音印刷の神戸支店は横浜の創業から六年後の一九〇四（明治三十七）年に開設されるも、一九二一（大正一〇）年には聖書の売り上げが落ち込んだ事が誘因となり閉鎖される。勿論、日本社会全体の推移も挙げられるが、少なくともキリスト教出版界は大きな節目を迎えていたのは間違いない。[19] 更には、新型機械の導入など印刷製本業界の進歩発展と企業努力からコスト減の波が押し寄せていた。加えて、多種多様な分野の書籍を要求する読者層に応じ、出版界も大衆雑誌の相次ぐ創刊や、廉価な文庫本（大正三年に新潮文庫が創刊）の登場、後の昭和に押し寄せる円本ブームなど、平吉の後事を固守する斎は、その迫りくる業界変貌の足音を感じ取っていたに相違ない。過激化する資本主義の荒波に福音印刷が勝ち残ることができたかは保証の限りではないが、斎の経営感覚の力量が試され、印刷業界に大きな影響と足跡を残していたかもしれない。それだけに斎の突然の死は悔やまれ、福音印刷にとって関東大震災は天災以上の痛恨事であった。

関東大震災によって、福音印刷は社屋、工場、倉庫等建物を失い、加えて残務を処理していた儆三が平吉の代からの会社役員に印鑑・重要書類を盗まれ、聖書・讃美歌の印刷契約が破棄される〝人災〟に遭う。しかし、結婚前から翻訳家・童話作家として活躍していた村岡花子は夫・儆三の経験を最大限に活かした仕事場として、また自らの創作表現場として、一九二六（大正十五）年「婦人と子供のた

めの」印刷所兼出版社・青蘭社書房を自宅の東京大森に起ち上げる。背景には平吉の遺徳を継いでいく花子・儆三夫婦の強固な意志があった。

会社経営と教会運営に多忙を極めた平吉の体に、やがて病魔が訪れる。喘息を悪化させた平吉は太田町の自宅から別宅のある、生家の小机に度々戻る。一九二二(大正十一)年初頭、福音印刷は創業二十五周年祝賀会を、横浜グランドホテルで開き、合資会社から株式会社へ格上げする。死期を悟ったのか、平吉は第一線から退き、代表を三男・儆三に譲る。同年五月十八日、福音印刷社内で開かれた横浜指路教会理事会に、病身高熱を押して小机から出席した平吉は太田町の自宅に戻るも、肺病併発で渡邉病院に入院。五月二十日夜に死去した。享年七十。母教会・横浜指路教会での葬儀では、平吉の親戚・芝ハルの夫、賀川豊彦が司式を務め、福音印刷設立発起人でもあった、星野光多が弔辞で以下のように述べた。「氏は大なる印刷者にして大なる聖書の印刷者なり。而して基督教実業家なり」「其の(福音印刷)収入の初穂は神に献ぐることとせり」「彼(平吉)は又隠れたる慈善家」であると評価した。[20]

村岡家の菩提寺は平吉の生家の近く、横浜市港北区小机町の泉谷寺であるが、平吉よりクリスチャンとなった為、その墓は妻や子供たち、嫁の村岡花子らと共に横浜市西区の久保山墓地にある。

[注]

(1) オーバン神学校卒業の著名な日本キリスト者には、明治学院院長の村田四郎。明治末の聖書改訳事業に尽力し、徳冨蘆花『富士』にも登場する佐久教会牧師・川添万寿得(ますえ)。横須賀学院創設者・松尾造酒蔵がいる。

(2) 李樹廷はルーミスだけでなく、平吉に洗礼を授けたノックスの援助も受けて、聖書の朝鮮語訳に精励する。ノックスの晩年の朝鮮伝道遊説は李樹廷の志を引き継いだものかもしれない。

(3) 福音印刷は明治三十年代のベストセラー、徳冨蘆花『不如帰』の朝鮮版を翻訳し一九一二（明治四十五）年に印刷し、朝鮮に輸出され、結果、鮮于日『杜鵑声』、金宇鎮『榴花雨』の翻案小説が誕生する（慎根縡『日韓近代小説の比較研究』、平成十八年五月、明治書院）など、福音印刷の事業が日韓文化交流にも影響を与えている。

尚、「村岡平吉と朝鮮」の項では、以下の資料を参照し、複合文とした。金文吉『津田仙と朝鮮』（平成十五年二月、世界思想社）、任展慧『日本における朝鮮人の文学の歴史』（平成六年一月、法政大学出版局）、金成恩『宣教と翻訳』（平成二十五年八月、東京大学出版局）、小野容照「村岡平吉と朝鮮」（「横浜プロテスタント史研究会報」四十六号、平成二十二年四月）、松尾尊兊『民本主義と帝国主義』（平成十年三月、みすず書房）

(4) 劉賢国「韓国最初の活版印刷による多言語『韓仏辞典』の刊行とタイポグラフィ」（『活字印刷文化史　きりしたん版・古活字から新常用活字表まで』、平成二十一年五月、勉誠出版）

(5) 上海美華書館は中国国内の印刷技術を進歩させた一方、書館出身者の印刷所経営者との価格競争に敗れたことと、創設当初の目的が達成されたとして一九三一（昭和六）年十二月三十一日を以て閉鎖した。（宮坂弥代生「美華書館―開設と閉鎖・名称・所在地について」注(3)と同書）また、明治五年創刊の「東京日日新聞」は上海美華書館から鉛活字を輸入、使用していた。（結果的には必要活字種の不足、活字形状の不適合等で成果は得られず）（参考・佐賀一郎「『東京日日新聞』による上海美華書館製活字の使用とその意義」＝「デザイン学研究」五十六巻二号、平成二十一年七月）

(6) 横浜製紙分社は『三浦郡及神奈川縣地誌』（明治二十九年三月）など、郷土地域関連書も出版している。

(7) 村岡儆三「チャブヤのはしり―山下町付近―」（『横浜今昔』、昭和三十二年十一月、毎日新聞横浜支局）

(8) 『開港五十年紀念横浜成功名誉鑑』（明治四十三年七月、横浜商況新報社）

(9) 星野光多は父・宗七が横浜で生糸商「星野屋」を営んでお

り、自身もヘボンと共に横浜での布教活動を展開していた、ジェームス・ハミルトン・バラから受洗するなど、横浜との深い関係から平吉と接点があった。星野も福音印刷同様、キリスト教系の印刷会社経営に関与していたようで、平吉が長老を務めた横浜指路教会の『指路教会六十年史』（一九三四・昭和九年）を印刷したのが東京王子の「星光印刷」で、同社は星野の名前から設立された可能性があるが、詳細は不明。

福永は、福音印刷に多額の出資で事業を支え、警醒社の印刷業務の大半を委託している。半田は横浜製紙分社の経営に参画していた可能性があり、福音印刷が神戸支社を構えるとほぼ同時に神戸に移住しており、平吉のブレーン的存在であったようだ。また、平吉の入信動機に「天道遡源」（アメリカ長老教会入華宣教師ウィリアムス・アレクサンダー・パースンズ・マーティンが書いた中国文布教書）の講義に確信を得たこと（どの教会で誰の講義かは不明だが、住吉町教会での山本秀煌による講義か）が挙げられているが、半田は一八九四（明治二十七）年、「天道遡源」の翻訳本を、青山学院運営に携わる小方仙之助が印刷人となっているメソジスト出版舎（後の教文館）から刊行しており、平吉と半田は教義理念解釈においても共通項があったことが窺える。

(10) 日本基督教興文協会は、アメリカ南メソジスト派宣教師で関西学院神学部教授等を歴任したサミエル・ヘイマン・ウエンライトが主幹となって設立されたキリスト教出版団体。関東大震災後、教文館と合同する。平吉の嫁、村岡花子は山梨英和女学校教師を辞して、植村正久の推挙で同協会に勤務し、翻訳業務に携わり、営業で同協会に出入りしていた平吉の三男・儆三と知り合い結婚することになる。

(11) 福音印刷は社会主義者・幸徳秋水の『帝国主義』（一九〇一・明治三十四年、警醒社書店）や芥川龍之介の生家・耕牧舎で働き、自死間近の芥川を訪れ聖書の話を交わした、室賀文武の『春城句集』（一九二一・大正十年、同）（芥川が同書の序文を書いている）などキリスト教以外の書籍の印刷製本も行っている。

(12) 平吉の功績の一つに「臺灣宣教師と共に盲人用活字を發明」

（「横浜貿易新報」、大正十一年五月二十三日、村岡平吉訃報記事）したことが挙げられているが、所謂、点字なのかは不明。因みに日本における点字は明治二十三年、東京盲唖学校教員・石川倉次が考案している。

⑿ 『神奈川県印刷業史』（平成三年十一月、神奈川県印刷工業組合）

⒁ 水沼辰夫『明治・大正期自立的労働運動の足跡―印刷工組合を軸として』（昭和五十四年十一月、ＪＣＡ出版）

⒂ マンローは、この三ツ沢貝塚で日本初の竪穴住居跡とアイヌ人の特長をもった原人五体の人骨を発見した。

⒃ 硯友社作家、江見水蔭は一方で考古学に造詣が深く、自著『地中の秘密』（明治四十二年五月、博文館）の中で、三ツ沢貝塚を発掘中の「熱心なる外人採集家」マンローを訪問する場面を描いている。

⒄ 平吉の三男・儆三は横浜商業卒業、五男・斎は明治学院卒業でむしろ、儆三の方が実業家向きに思える。平吉は儆三を後継者として考え、経営感覚を磨かせる為、横浜商業に入学させたのだろうか。

⒅ 村岡花子の孫娘、村岡恵理『アンのゆりかご』（平成二十三年九月、新潮文庫）の中に斎の英国時代の〝成果〟を物語るような以下のような記述がある。「斎は兄（注・花子の夫、儆三）を慕い、よく遊びに来た。斎は、情と活気に満ちた愛すべき性格だった。『イギリスではね、本そのものが芸術なんですよ。僕は日本でもイギリスに負けないくらい美しい本を作りたい。お姉さん（花子）の本は、全部僕らが印刷しますからね』」

⒆ 明治期、大正期の教徒の意識の違いについて、黒川知文は「明治時代のキリスト教徒は、武士道や儒教の素養があり、国家との関わり合いに苦悩した。それに対して大正時代になると個人主義と自由主義、さらに教養主義がキリスト教徒の特徴にあげられる」（「日本におけるキリスト教宣教の歴史的考察Ⅲ」＝「愛知教育大学研究報告　人文・社会科学編」五十三号、平成十六年三月）と指摘している。また、信者数減少と教界の衰微は裏返せば受け身な活動ではなく、従来の信

者が自主性を保有、主張してきたことの証明でもある。

⑳　出典、横浜指路教会機関誌「指路」第百十二号（大正十一年五月二十日発行）。尚、「指路」は長年、福音印刷が印刷を担当している。